

中医皮膚科学の沿革

- 中医皮膚科学は、以前より中医外科に含まれている。中医学による皮膚疾患の治療経験の多くは、中医外科の書籍に記載されている。
- 中医皮膚科学は中医学の整体観と弁証論治に基づく治療学である（図1）。

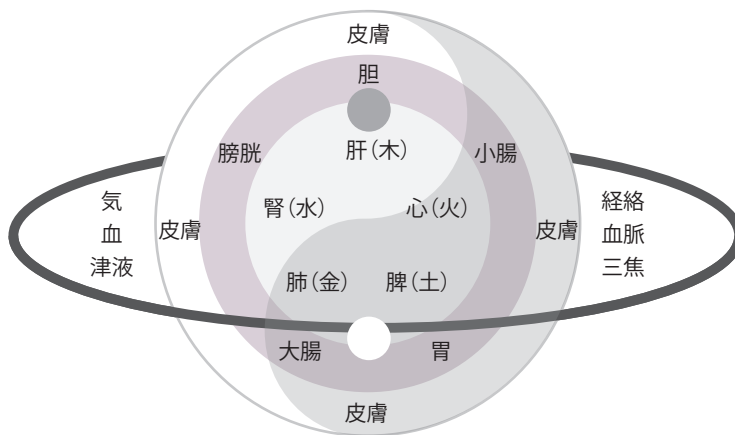


図1 中医学の皮膚生理観—皮膚は内臓の鏡

- 春秋時代の『五十二病方』に、皮膚疾患の症状を表す記載がある。例えば、身疔（皮膚瘡瘍）・白処（白斑）・面皰赤（にきび）など。
- 『黄帝内経』や『金匱要略』には皮膚症状についての記載がある。『金匱要略』に書かれている浸淫瘡（急性湿疹・皮膚感染症を含む）に使う黄連粉、狐惑（ベーチェット症候群に相当）に使用する甘草瀉心湯などは、いまでも使われている。
- 隋代の『諸病源候論』には、漆による発疹の現象について、「稟性畏漆」（体質的に漆に弱い）、「但見漆便中其毒」（漆に触れると中毒になる）などと書かれており、アレルギー体質に対する一定の理解が示されている。同書のなかに「湿疥とは、小さい丘疹で、よく汁が出る。なお、みな虫がみられ、針で取り出してみると、渦虫のような小さい虫が認められる」とあり、それは現代の疥癬とほぼ同じ皮膚症状である。
- 宋金元の時代になると、内治と外治のバランス、および整体と局所の関連性が重視され、瘡瘍の陰陽弁証方法も確立された。特に、金元四大家の劉完素・張從正の学説に基づき、皮膚病の多くは火熱によって発生すると考えられるようになった。清熱涼血・清熱解毒・清熱利湿などの方法が多く使われ、後世の皮膚病治療の発展に貢献した。黄連解毒湯・防風通聖散・消風散・当帰飲子などの名方が続々と作られた時代である。

- 明清時代では、皮膚病の知識が豊富になり、『外科正宗』『医宗金鑑』『温病条弁』『医方集解』などの書籍に詳細な病名と治療方法、処方が多く記載され、竜胆瀉肝湯・五味消毒飲・犀角地黄湯など、現在の皮膚疾患にも常用されている処方が多く記載された。清・顧世澄の『瘍医大全』は、歴代の外科書籍の精粹を網羅し、参考価値がある本として知られている。
- 清代・吳尚先の『理瀉^{りやく}駢^{べん}文』は外用治療の集大成ともいえる大作で、これによって外用治療の原則が確立された。
- 現代になると、感染性皮膚疾患以外に、アレルギー性皮膚疾患に対する認識が深まり、清熱解毒・涼血祛風などの方法が汎用されるようになった。また、整体観に基づいた弁証論治によって各個体の皮膚症状と内臓、気血津液の関係も重視され、多様な治療方法と処方が作られた。